

ネヘミヤ記1章 「涙の祈り」

1A 御民への重荷 1-3

2A 心を尽くす祈り 4-11

1B 座って泣く者 4

2B 主への嘆願 5-11

1C 天の神 5

2C 夜昼の祈り 6

3C 罪の告白 6-7

4C 神の約束 8-9

5C 嘆願 10-11

本文

私たちは、これからネヘミヤ記をじっくりと読んでいきたいと思います。ネヘミヤは強い指導力を持って、エルサレムの町の再建を果たしました。それが神から始まり、神によって成ったことを証しているのがこの書物です。時代は、ユダの民がバビロンにおける七十年の捕囚後、エルサレムに帰還した後の時代です。聖書には、エズラ記、ネヘミヤ記、そしてエステル記が、その時代の歴史を取り扱っています。エズラ記には、帰還した民が神殿を再建した時のことを書き記しています。ネヘミヤ記には、周囲が敵に取り囲われている中、エルサレムの町を再建したことです。城壁を再建し、それによって神殿の礼拝が守られ、民がそこに住むことができるようにしたことです。エズラ記は「神の民の建て直し」を主題とするならば、ネヘミヤ記は「神の民の守り」が主題です。

神殿を建て上げるということは、礼拝を再び建て上げることで、それは教会時代の私たちには、教会を内から建て上げていくことに他なりません。城壁を建て上げるということは、まさに「守りを固める」ことです。中東の地域にある町は、ついに二世紀前まで城壁の中に生きていました。それだけ外敵が多いのです。当時、エルサレムとユダヤ地方にいるユダヤ人たちは、城壁がないために嫌がらせを受け、反対を受けて、敵のそしりを受けていたのです。神の民は、絶えず内と外に敵がいます。激しい霊の戦いがあります。そして絶えず悪魔や悪霊による巧みな策略による、攻撃があります。そこで、私たちがどのようにしてそれらの悪の勢力に対抗するのか、そして単に建て上げられるだけでなく、その建て上げたものを堅く、しっかりとしたものにしていくのか、こうしたことを学んでいきます。

私たちの救いで言うならば、良い業を私たちの内で始めてくださるのは神です。神は、それを、私たちに志として立たせてくださり、事を行わせてくださるのです。ピリピ書 2:13 に、「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」とあります。キ

リスト者として神に仕えていきたいと願っている人には、ネヘミヤ記は最適です。どのようにしたら、主から与えられた重荷が具体的に目に見える形になっていくのかを、ネヘミヤを通して見ていくことができます。そして、信仰を堅くしていくことについては、コロサイ書にこうあります。「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい。キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおりに信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。(2:6-7)」自分に与えられた信仰が、どうしても揺らいでしまう。そう悩んでおられる方にも最適です。

ネヘミヤという人物は、数多くの教会指導者の中で読まれています。彼の率いるエルサレム再建事業から、リーダーシップについて、神の民をどのように治め、率いていくのか霊的原則を学んでいます。

ネヘミヤに指導力にはいくつかの特徴がありますが、その大きな一つが「祈り」です。彼は具体的に再建事業を進めていきますが、それがいかに祈りによって始まり、祈りによって支えられて、祈りによって完成したかを、ネヘミヤ記を読むとはっきりと分かります。ネヘミヤ記 1 章は、その祈りから始まります。

1A 御民への重荷 1-3

1 ハカルヤの子ネヘミヤのことば。第二十年のキスレウの月に、私がスサの城にいたときのことであった。2 私の兄弟の一人ハナニが、ユダから来た数人の者と一緒にやって来た。私は、捕囚されずに残された逃れの者であるユダヤ人たちについて、またエルサレムのことについて、彼らに尋ねた。3 彼らは私に答えた。「あの州で捕囚を生き残った者たちは、大きな困難と恥辱の中にあります。そのうえ、エルサレムの城壁は崩され、その門は火で焼き払われたままです。」

「第二十年」というのは、アルタクセルクセス王の治世第二十年ということです。紀元前 446 年から 445 年にかけての年です、「キスレウ」の月は今の 11 月から 12 月にかけてなので、446 年 12 月頃ではないかと思われます。エズラがエルサレムに帰還後、約 13 年後のことです。そして「スサ」は、古代ペルシアであるエラムの時から首都です。今のイランの南西部分にあります。そして、エステル記における王妃エステルの活躍は、スサにおけるものです。ペルシア帝国は非常に栄えました、スサから、あの黙示録 3 章に出てくるサルディスまで 2700 ㎞の郵便道路ができました。そしてユダヤ人は、アッシリアとバビロンによって捕え移されたのですが、むしろ外にいたほうが栄えていた面があります。

そして、ハナニにネヘミヤが尋ねたところ、ユダヤ人の残りの民とエルサレムは、「大きな困難と恥辱の中にあります」とあります。これからネヘミヤ記において、敵による誹り、また内部からも敵の策略でネヘミヤに攻撃をしてきます。そして、「城壁は崩され、その門は火で焼き払われたまま」とありますが、これは神殿再建の時からそうでした。エズラ記 4 章で、周囲の住民が反対して、地

方政府をも買収して、王に書状を送りました。城壁を修復する工事を、彼らの王に対する反逆であると中傷したのです。その後、預言者ハガイとザカリヤが遣わされて、彼らは工事を再開することができました。それでもそれは、規模としては非常に乏しく、町全体の状況はずっと、このような状態になっています。

ネヘミヤの行動に注目したいと思います。動詞を見ると分かります、「尋ねた」とあります。次に、「泣く」それから「祈る」です。尋ねたことですが、ネヘミヤのほうで兄弟のハナニに尋ねています。神の民に対して重荷を持っていました。神に仕える者は、神ご自身が持つておられる関心に自分自身も関心を寄せています。そこには、自分というものは存在しません。それは、母親が遠くの地から帰ってきた息子を出迎えるように、自分のことはどうでもよく、神の民がどのようにしているかに関心を持っていたのです。聖書ではこれを「愛」と呼び、愛は神のゆえに、また他者のゆえに、自分を忘れさせます。

2A 心を尽くす祈り 4-11

1B 座って泣く者 4

4 このことばを聞いたとき、私は座り込んで泣き、数日の間嘆き悲しみ、断食して天の神の前に祈った。

次の動詞は、「泣く」です。ネヘミヤはその民が酷い状態になっているのを知って、自分のことのように泣きました。それだけその問題を心に入れていたということです。新約聖書では、使徒パウロがコリントにいる人々のために泣いています。「Ⅱコリ 2:4 私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらにあなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があるあなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を、あなたがたに知ってもらうためでした。」コリントの教会で、パウロの強い命令で、近親相姦の罪を犯していた男を教会から取り除きました。それでその男が悲しみによって押しつぶれそうになっています。そのパウロが前に書いた手紙というのは、それは厳しいものでした。けれども、それは怒りに満ちていたからではなく、大きな苦しみと心の嘆きをもって、涙ながらに書いていたのです。ネヘミヤも同じように、罪に対する嘆きと悲しみ、罪からもたらされたことを悟って、嘆いている姿です。

「悲しむ者は幸いです」と主ご自身も、言われましたね。アダムが罪を犯して、神が園の中を歩いておられた時、エバと共に自分の身を隠しました。そして神は、「あなたは、どこにいるのか？（創世 3:9）」と呼びかけました。これは、二人に怒ってとっちめようとする恐ろしい言葉ではなく、神が愛する、ご自分のかたちに造られた者を失ってしまった嘆きの声です。その証拠に、神は彼らに皮の衣を着せてくださいました。そして園を追放せねばなりませんでした。それは罪を宿したまま神のところにいることはできないからです。愛している者が罪を犯す時、その愛は涙と嘆きとして溢れ流れます。

そして祈りに導かれます。神の民に関心と重荷を抱き、その悲惨な状況に泣き、そして祈りに導かれました。そして、エルサレム再建事業が始まります。ネヘミヤ記が祈りから始まり、祈りで終わることに注目してください。「13:31 私の神よ、どうか私を覚えて、いつくしんでください。」で終わっています。福音宣教は祈りから始まります。使徒の働きで、弟子たちが祈っているところに聖霊が降り、福音宣教が始まりました。アンティオキアの教会も、パウロとバルナバを遣わすのは祈っていたからでした。そして教会が生まれるのも、祈りによってです。教会が建て上げられ、また守られるのは、ひとえに祈りからです。

神は、他の聖徒たちのために祈りなさいという、執り成しの祈りを命じています。「エペ 6:18 あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」使徒パウロは、これを霊の戦いがあるということをお話している中で語りました。つまり、御霊の力に支えられた祈りこそが、神の聖徒たちが敵の攻撃から守られ、堅く立つことができる武器です。祈りの武器は、敵に決定的な打撃を与えます。なぜなら、私たちの主は死んで、そしてよみがえられた勝利者だからです。悪魔は十字架と復活の御業の前で無力化されました。祈る時に、私たちの味方であられる神が悪魔の要塞を打ち砕くのです。したがって、悪魔は別の手法を取ります。キリストの内から出ていくようにおびき寄せる作戦です。つまり、私たちがひざまずいて、祈らせないようにします。そして私たちが、神に拠り頼まずに、自分の力や知恵に拠り頼むようにさせます。ですから、祈らせないようにする力に私たちは抗わないといけません。

ネヘミヤ記を読みますと、祈りにはいろいろな種類があります。興味深いのは、ネヘミヤは一秒か、二秒ぐらいしか祈らなかったであろう、瞬間祈禱を捧げています。王に、「あなたは何を願っているのか？」と問われた時に、答える前に神に祈りを捧げました。また、敵にそしられた時も、その場で神に彼らを裁いてくださるよう祈っています。こうした、瞬時の祈りをネヘミヤは捧げていきますが、その前に長い期間に渡って祈りを捧げていました。実に、王からエルサレム帰還の許可が出される四か月前から、ずっと彼は祈りを捧げていました。

4 節には、「**座り込んで泣**」いたとあります。その悲しみが重かったので座りました。学者エズラも座って何時間も呆然としていた場面が出てきていました(エズラ 9:4)。エズラは、ずっと座ってそれから気を取り戻して、ひざまずいて祈りました。そして涙を流して祈っている時に、シャカヌヤが異邦人の妻や子供を取り除こうという助言を行い、それを実行に移しました。ネヘミヤも同じです。エルサレムの悲惨な状況を聞いて、座って泣き、それから祈り、そして行動に移しました。

そして実は、この「座り込む」という言葉のヘブル語は、「留まる、住む、腰を据える」という意味で使われています。ダビデが詩篇で、自分の一つの願いは「27:4 私のいのちの日の限り【主】の家

に住むことを。」と言った時の「住む」が同じ言葉が使われています。神は私たちに、立ち上がって、歩き始める前に、座していることを教えています。主が自分に何をされようとしているのか、主が私たちに、何をしようとしているのか、立ち上がって歩く前に、座るように命じられているのです。赤ちゃんと同じです。座ることを知らなかったら立ち上がれません。そして立つことが分からなければ、歩くことも分かりません。私たちはしばしば、霊的に、座ることをしないで、歩こうとするのです。「私がこういうことをすれば、良い結果が出る。」として動きます。いいえ、座ってください、そして祈ってください。座ることによって初めて、主が何をされているのか、何を命じておられるのか聞くことができます。

そして、ネヘミヤは「断食」しました。断食は旧約だけでなく、新約時代にも実践されていたものです(使徒 13:2)。断食をすることの意義は、「霊を養うために肉を否定する」ことです。私たちは日頃はその反対をします。肉体の養いのために、一日三回の食事、また間食まであります。そのために私たちは時間を費やして、霊の養いが疎かになります。これを逆にするのです。食べることは後にして、霊的な事柄に集中するのです。肉体は弱まりますが、霊が強められます。

2B 主への嘆願 5-11

次から祈りの内容に入ります。かつて、同じようにエルサレムが廃墟になっていたことを嘆いて、その回復のために祈ったダニエルの祈りが 9 章に書かれていますが、とても似ています。後でぜひ、読んでみてください。

1C 天の神 5

5 「ああ、天の神、【主】よ。大いなる恐るべき神よ。主を愛し、主の命令を守る者に対して、契約を守り、恵みを下さる方よ。

祈りの中で最も大事なことの一つは、「祈っている相手」であります。誰に対して祈っているのか、であります。ネヘミヤはこれを言葉で、はっきりと言い表しています。まず、「天の神」と言っています。天の神は、遠くにいる神という意味ではなく、すべて目に見えるものを治めて、動かしている主権者ということです。「詩 115:2-3 なぜ国々は言うのか。「彼らの神はいったいどこにいるのか」と。私たちの神は天におられその望むところをことごとく行われる。」そして、「大いなる恐るべき神」というのは、力ある神ですね。そして、「契約を守り、恵みを下さる方」とあります。神は契約、約束を守って下さる方です。ご自分がこうすると決めたことは、契約ですから変更することはできません。その契約に基づいて、いつくしみを賜ってくださいます。私たちは祈りの時に、このように主のことを思い、主がどのような方を思い出して時間を過ごします。このことをするだけで、自分の見方も変わります。自分の目にかけている色眼鏡を外して、神が持つておられる目で物事を見ることができるからです。

2C 夜昼の祈り 6

6 どうか、あなたの耳を傾け、あなたの目を開いて、このしもべの祈りを聞いてください。私は今、あなたのしもべイスラエルの子らのために、昼も夜も御前に祈り、私たちがあなたに対して犯した、イスラエルの子らの罪を告白しています。まことに、私も私の父の家も罪を犯しました。

ネヘミヤは「昼も夜も」祈っていました。先ほど話したように、ネヘミヤはユダヤ人のこと、エルサレムのことをずっと気にしていて、重荷をもって祈っていました。私たちにも重荷が与えられると、それが絶えず自分の心に上がってきて、それで祈りを捧げます。そして、主がそのような祈りを求めておられます。「ルカ 18:7 まして神は、昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。」

この表現は、人々のことをいつも気にかけて労している時に使われています。パウロがエペソの長老たちにこう言いました。「使 20:31 ですから、私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがた一人ひとりを訓戒し続けてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。」テサロニケの人たちのために、祈っていました。「I テサ 3:10 私たちは、あなたがたの顔を見て、あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるようにと、夜昼、熱心に祈っています。」また、同じように仕事も、彼らのために夜昼行っていたとあります。「2:9 兄弟たち。あなたがたは私たちの労苦と辛苦を覚えているでしょう。私たちは、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えました。」

3C 罪の告白 6-7

7 私たちはあなたに対して非常に悪いことをして、あなたのしもべモーセにお命じになった、命令も掟も定めも守りませんでした。

6 節と 7 節で、ネヘミヤは罪を犯したことを言い表しています。罪の告白は、神との交わりには死活的です。人に対してもそうですね、罪を犯したら、その人に何をお願いしようが、信頼を回復するまで無理なことです。同じように、罪を犯しているなら、その罪によって神との交わりが途切れます。神は光であるので、私たちも罪を言い表して、御子の血で清めていただき、神に不義を清めていただかなければいけません。それで交わりを持つことができます。「I ヨハ 1:9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」

注目していただきたいのは、ネヘミヤは自分もその罪を犯した者の一人に数えていることです。「私も私の父の家も」と言っています。自分自身のことを入れているのです。彼は個人的には、ここで話している大きな罪を犯していなかったと思います。けれども、自分自身も入れているのです。これが、仕え人の祈りであり姿勢です。私たちキリスト者は、同じように「私たち」という主語で持つ

て言い表すことのできる、一つのキリストの体にされた共同体です。一つにされているのですから、「この教会はこれが足りない、ここが間違っている」と評価するのは、自分自身を評価していることになります。自分にそのまま跳ね返ってきます。実は自分が足りないのです、自分が間違っているのです。なぜなら、自分もその一部だからです。私たちは神から呼ばれて、一つの体にされたのですから、「主よ、私たちを憐れんでください。」と自分も含めて祈ります。重荷をもって執り成します。これが、仕える人の祈りです。

4C 神の約束 8-9

8 どうか、あなたのしもべモーセにお命じになったことばを思い起こしてください。『あなたがたが信頼を裏切るなら、わたしはあなたがたを諸国の民の間に散らす。9 あなたがたがわたしに立ち返り、わたしの命令を守り行うなら、たとえ、あなたがたのうちの散らされた者が天の果てにいても、わたしは彼らをそこから集め、わたしの名を住まわせるためにわたしが選んだ場所に連れて来る。』

主がモーセを通して、かつて語ってくださったことです。主に立ち返れば、エルサレムに彼らを連れ帰らせてくださる、ということです。「申 30:1-5 私があなたの前に置いた祝福とのろい、これらすべてのことがあなたに臨み、あなたの神、【主】があなたをそこへ追い散らしたすべての国々の中で、あなたが我に返り、あなたの神、【主】に立ち返り、私が今日あなたに命じるとおりに、あなたも、あなたの子どもたちも、心を尽くし、いのちを尽くし、御声に聞き従うなら、あなたの神、【主】はあなたを元どおりにし、あなたをあわれみ、あなたの神、【主】があなたを散らした先の、あらゆる民の中から、再びあなたを集められる。たとえ、あなたが天の果てに追いやられていても、あなたの神、【主】はそこからあなたを集め、そこからあなたを連れ戻される。あなたの神、【主】はあなたの先祖が所有していた地にあなたを導き入れ、あなたはそれを所有する。主はあなたを幸せにし、先祖たちよりもその数を増やされる。」また、10 節は出エジプトの出来事です。イスラエルは、エジプトから力強い御手をもって贖われました。

聖書を眺めると、聖徒たちの祈りは、神の約束に満ちています。主が語られたことを思い起こし、それを神に申し上げます。私たちはしばしば、神の御心が分からないと言うのですが、神の御言葉にある約束はそのまま神の御心なのです。ですから、神にそのことを申し上げることほど、効果的な祈りはありません。そして、祈っているうちに私たちが変わります。私たちの信仰が建て上げられます。主が語られたことを自分自身が思い起こすことができます。そして御霊がその祈りを運んでくださいます。

5C 嘆願 10-11

10 これらの者たちこそ、あなたがその偉大な力と力強い御手をもって贖い出された、あなたのしもべ、あなたの民です。11 ああ、主よ。どうかこのしもべの祈りと、喜んであなたの名を恐れるあ

なたのしもべたちの祈りに耳を傾けてください。どうか今日、このしもべに幸いを見させ、この人の前で、あわれみを受けさせてくださいますように。」そのとき、私は王の献酌官であった。

「この人」とは、次に出てくる「王」のことです。彼は献酌官でありましたから、王の前で、願いがかなえられ、憐れみを受けることができますようにと祈っています。「憐れみ」は、すばらしいです。本当ならだめになってしまっておかしくないのに、主が願いをかなえてくださることで、主が憐れまれる時は、具体的な業が行われます。病気の人なら癒され、経済的に事欠いている人は満たされます。神の慈善の業と言えはよいでしょう。

そしてネヘミヤはこの祈りを捧げて、王から許可を受けます。この出来事がエルサレムの城壁のみならず、イスラエルの民の完全な回復、つまり彼らの王メシアが到来するきっかけとなります。ダニエルが 9 章で預言しました、エルサレムが再建せよという命令が発せられてから七十週が定められているとあります。キリストがイスラエルに、そして世界に現れるそのご計画に従って、ネヘミヤの祈りは導かれていたのです。皆さんの祈りも同じです。神の御心にかなった祈りをするということは、神の大きな、壮大なご計画の中で重要な一コマを演じているのかもしれません。小さなことに忠実でありなさい、大きなものを任せようと言われた主ですから、小さき僕は、大きな神に用いられるのです。